

龍谷大学矯正・保護総合センター通信

Ryukoku Corrections and Rehabilitation Center (RCRC) News



Vol.18

rcrc.ryukoku.ac.jp

〔発行日〕

2025年9月5日

〔編集・発行〕

龍谷大学 矯正・保護総合センター



2024-2025年の活動を振り返って

龍谷大学

矯正・保護総合センター長 浜井 浩一

矯正・保護総合センター長となって7年目を迎えました。慣例に従い2024年を振り返りつつ、この1年間のセンターの活動についてご報告させていただきます。

当センターは、矯正や更生保護に関する教育実践としての矯正・保護課程と研究としての矯正・保護研究センターを統合し、新たに社会貢献活動を付け加えて2010年に開設されました。

2024年度の教育活動については、矯正・保護課程の延べ受講者数は前年度より450名多い3,690名となり昨年と同様に過去最高の受講者数を更新しました。また、コロナ禍でのオンライン授業の経験を生かして、2023年度から矯正・保護課程の科目の一部を社会人向けにオンライン（オンデマンド）で提供することで、受講生の都合に合わせて受講できるようにするなど新たな教育実践を行った結果、北は青森県から南は山口県まで受講の申し込みがあり、社会人受講者数が延べ117名となりこちらも過去最高を記録しました。

研究活動については、團藤プロジェクトにおいて、2023年4月にNHKとの共同研究の成果がNHK・ETV特集「誰のための司法か～團藤重光 最高裁・事件ノート～」として放送され大きな反響がありました。これを受けてさらなる整理事業の必要性が認められ、2024年度の新規・大型事業に採択され、学術的価値の高い資料をデジタルアーカイブ化し、オンラインで配信することを目指して、さらに3年間の第二次の整理作業が開始されました。また、2025年2月には、日本評論社から『團藤重光日記1978－1981年』が刊行されました。

実証研究プロジェクトでは、センター長の浜井が、NHKに協力する形で2023年に全国の少年院において実施した闇バイトに関する調査研究をフィリピン共和国マニラ市で開催された第15回アジア犯罪学会（2024年8月）において報告し、大会実行委員会からBest Paper賞が授与されました。また、2025年3月に、NHKが佐賀少年刑務所と多摩少年院において実施した闇バイトに関する調査においても、浜井が専門家として協力し、その成果が4月に放映された「NHKクロズアップ現代」において紹介されました。さらに、実証研究プロジェクトでは、2024年10月にセンターが特別会員でもある日本犯罪社会学会の第51回大会において、同学会の会長でもある浜井が、受刑経験のある元法務大臣の河井克行氏らを招聘し、テーマセッション「拘禁刑執行に向けて刑務所と刑務官に

期待すること」を企画し、その内容が関西テレビや東京新聞など多数のマスコミで紹介されました。

2016年度から弁護士金子武嗣氏からの寄付金（「弁護士金子武嗣積立金」）を活動資金とし、未来の刑事司法を支える人材養成や研究の発展等に取り組んできた刑事司法未来プロジェクトが、2024年度末で活動を終了しました。2024年度には、これまで同プロジェクトの中心となって各事業を企画・推進してきた龍谷大学名誉教授の石塚伸一客員研究員によって、寄付者の金子氏と共にこれまでの研究活動の成果がとりまとめられ、2024年12月には、日本評論社から『幸徳秋水 大逆事件の研究～「再審請求」を追う～』が刊行されました。

センターでは、教育・研究に加えて社会貢献活動を中心に新たな活動にも挑戦しています。2023年12月16日には、龍谷大学深草キャンパスにおいて第14回矯正・保護ネットワーク講演会が開催されました。講演会では、「再生～西鉄バスジャック事件からの編み直しの物語～」をテーマに、不登校を考える親の会「ほっとケーキ」代表で、西鉄バスジャック事件の被害者でもある山口由美子氏にご講演いただきました。講演では、事件後、山口氏が犯罪被害者として加害者などに関わりながら、様々な人たちとの出会いを通じて経験をされたことを語っていただき、参加者からも好評を得ることができました。詳しくは、本通信内の講演録をご参照ください。

また、2024年度も、社会貢献活動の一環として、浜井が、奈良県更生支援のあり方検討会や全国居住支援協議会の「支援付き住宅調査事業委員会」の委員として活動するなど、兼任研究員や客員研究員、嘱託研究員が研究成果の社会実装という観点からさまざまな地方自治体等における再犯防止の取り組みに協力しました。さらに、龍谷大学名誉教授の福島至研究フェローや石塚伸一客員研究員、廣末登嘱託研究員を中心に新聞等に多数のコメントが掲載されるなどメディアでの情報発信も行われました。

2025年度は、6月1日に施行された拘禁刑に向けた取り組みをはじめ、第二次再犯防止推進計画の策定など再犯防止に向けた刑事政策の流れが一層加速されることが見込まれます。矯正・保護総合センターにおきましても、これまでの経験を踏まえ、2025年以降も、教育、研究、社会貢献のさらなる充実に努めていきます。引き続きよろしくお願いいたします。

センター主催 第14回矯正・保護ネットワーク講演会

2024年12月14日に開催しました第14回矯正・保護ネットワーク講演会では、不登校を考える親の会「ほっとケーキ」代表で、2000年に起きた西鉄バスジャック事件の被害者でもある山口由美子氏を講師にお迎えし、「再生～西鉄バスジャック事件からの編み直しの物語～」と題して、ご講演をいただきました。当日は、約230名の方にご参加いただき、講演会は盛況のうちに終了することができました。

「再生 ～西鉄バスジャック事件からの編み直しの物語～」

講演者 やまぐち ゆみこ **山口 由美子 氏**（不登校を考える親の会「ほっとケーキ」代表）

開催日時／2024年12月14日(土) 13時30分～15時00分

開催場所／龍谷大学 深草学舎 和顔館 B201教室

開催趣旨

龍谷大学は、100年以上に及ぶ浄土真宗本願寺派の宗教教誨を基盤としながら、1977年に刑事政策に特化した教育プログラムとして、矯正課程（現在の矯正・保護課程）を設置しました。それ以来、刑務官や法務教官、保護観察官などの専門職のほか、保護司や篤志面接委員、BBSなどのボランティアの養成に努めて参りました。

また、2001年には、矯正・保護についての学術研究を推進する矯正・保護研究センターを設置しました。この研究センターは、2002年度からは、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（AFC）に採択され、8年間にわたり研究活動を行ってきました。

2010年には、矯正・保護総合センターを開設し、矯正・保護課程の教育活動と研究センターの研究活動との有機的な統合をはかることとしました。さらに、矯正・保護の分野における社会貢献活動も、事業の柱として明確に加えることとしました。その社会貢献活動の一環として、2011年度から矯正・保護ネットワーク講演会を開催させていただいています。この講演会は、矯正・保護の実務家や関係する行政機関、民間団体、企業家、専門職の方々、地域の方々など、矯正・保護の問題に関心を寄せる多様な人びとに対し、それぞれの思索と相互理解を深めるため、議論・研修の場として提供させていただいています。

今回は、2000年5月に西鉄バスジャック事件に遭遇し重傷を負い、その後、子どもたちの居場所をつくる活動に邁進する傍ら、犯罪被害者として加害者と関わりながら子育て・人権について全国各地で講演活動を行っている山口由美子氏を講師にお招きし、「再生～西鉄バスジャック事件からの編み直しの物語～」をテーマにご講演いただくことになりました。

この講演がお集りいただいた皆様に実り多いものとなりますよう、心から願っております。

プログラム

●挨拶・趣旨説明・講演者紹介

浜井 浩一（龍谷大学矯正・保護総合センター長／同大学法学部教授）

●講演

講演者 山口 由美子氏（不登校を考える親の会「ほっとケーキ」代表）

●質疑応答

後援

京都府、京都市、浄土真宗本願寺派、京都保護観察所、京都府保護司会連合会、京都府更生保護女性連盟、更生保護法人京都府更生保護協会、京都BBS連盟

「再生 ～西鉄バスジャック事件からの編み直しの物語～」

講演者：山口 由美子 氏

はじめに ～事件のこと～

皆さん、こんにちは。はじめまして。今日は龍谷大学矯正・保護総合ネットワーク講演会にお招きいただき、本当にありがとうございます。矯正・保護に関心のある方がお集まりだとお聞きしております。

私は被害者としてここで話をさせていただきますが、被害者といってもさまざまで、いろんな方がいらっしゃいます。だから、私が良いとか悪いではなくて、それぞれだなと。今日は私が一被害者として私の受けた事件について、その後の生き方について、冒頭の挨拶で浜井センター長がおっしゃったように、今日は私の経験をお話しさせていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

本日、皆様にレジュメを配付いただいていますので、それに沿ってお話させてください。最初に事件の概要から。ある程度、年を取った方はご存じだと思いますが、若い方は知らない方もいらっしゃいます。まずは事件のことをお話ししたいと思います。

2000年5月、もう25年前になります。佐賀駅バスセンター発福岡天神行きのバスが、17歳の少年によって乗っ取られ、1人が死亡、4人が重軽傷を負いました。

バスの中の様子からお話しします。1人亡くなられたと言いましたが、亡くなられたのは塚本さんとおっしゃいます。私はその方と一緒に福岡の天神で行われるコンサートに行くためバスに乗りました。バスに乗って、しばらくしたときに、一番前に座っていた少年が突然立ち上がり、「このバスを乗っ取ります。荷物を置いて後ろに行ってください」と丁寧に言ったのです。私は本気にしませんでした。何でこの子はこんなことを言っているんだろうと、そんなふう感じたのですが、乗客の皆さんが後ろに下がるので、私も塚本さんと一緒に後ろに下がりました。

そして何でだろうと思っていたのですが、1人だけ居眠りをしている後ろに下がっていない乗客がいらっしゃったんですね。その方に気づいたときに少年は逆上しました。「おまえは俺の言うことを聞いていない。後ろに下がっていない」と言って、その方が後ろに下がられた途端、首を刺しました。そのとき、初めてその少年が本気だったんだということに気づいたのですが、本気で人を殺したいとか、傷つけたいと思って生きている子どもはいない。私の中にそういう思いがあり、今、少年の心は少年本来の心ではない。本来の心に戻ってほしいという気持ちで必死に祈っておりました。

バスはどんどんと東に向かって走っていました。そうした中、運転手の方が「トイレ休憩は必要じゃないか」と言ってくださり、少年もそれに応じる形でトイレ休憩を取ったので



す。少年の指示で、駐車場ではない、道路の路肩に止めてくださり、1人目の方がバスを降りられました。

バスは路肩に止まり、少年に気づかれないように非常電話のあるところに運転手がうまく止めてくださったんですね。降りた方は非常電話をかけに行ってくださいました。非常電話をかけている人がいる、何かあったのかなと思って、高速道路を走っている乗用車がバスの周りに止まり始めました。それを見て少年は慌てて、持っていた包丁を運転手に振りかざし、「あいつは裏切った。バスを早く出せ」と脅しました。降りた方を置いて、そのままバスは出発したんですね。バスが出発したのを確認して少年は後ろにきました。

私の前に立ち止まり、「あいつは裏切った。連帯責任です」という言葉とともに、私はいろんなところを切られ、座席に座っていられなくなり、通路に転がり落ち、下に座り込みました。下に座り込んで、自分の流した血を見ながら、傷は痛くはなかったんですが、傷を感じながら、少年の心はこんなにしなければいけないぐらい傷ついていったんだ。私のこの傷と同じくらい、彼は傷ついてたということを感じました。そして、そういう少年を殺人者にするわけにはいかない。なぜか自分の中からそういう思いが湧き起こり、傷の浅かった右手で自分の体を支え、左手は心臓より高くひじ掛けに置いていたんです。無意識だったのですが、あのときに倒れていたら確実に死んでいたと思います。出血多量で。

彼を殺人者にしたくないと思ったことが、逆に私は自分の命を守ったのと、後でそんなことも考えました。

私はそういう状況にいたのですが、乗客2人が窓から逃げたのです。2人が逃げたということで、私の横にいた塚本さんが少年に2回刺されたようです。私はそのことを知りませんでした。私自身は死んだらいいなと思いながら座り込んでいたのですが、かなりの出血で意識がもうろうとなり、このまま死んでしまうんだなとも思いました。本当に生死が同じ



線上にあったかと、後でそんなことも思っています。

臨死体験の本を読んだことがあったのですが、お花畑にいくようにふわふわして気持ちがいいとか、光に吸い込まれていくようだとか、そんなことが書いてあって。私の場合、本当に光に吸い込まれていく、眠りに入っていくような気持ちいい感じでした。そうやって私は座り込んでいたんですね。若い女性が友達と2人で乗っていたのですが、少年はその1人に「次、乗客が逃げたらおまへの番だ」と言ったんですね。言われていない方の女性が、友達が刺されたら嫌だという思いで、「見張りに立たせてください」と立ってくれました。そういう緊迫した状況の中で若い女性が見張りに立ってくれたんです。そのとき、私は意識があったんですが、すごい方がいらっしやったなと思いつつ、自分はだらしく座り込んでいました。

そして、その女性に「何か欲しいものはあるか」と少年は聞いたそうです。その方は、乗客全員のことを考えて、食べものや飲みもの、それから簡易トイレ、5月といってもまだ夜は寒いので毛布を要求してくれました。

少年は携帯電話で警察にそれらを差し入れるよう要求し、差し入れてもらったんですね。差し入れてもらったとき、「次、おまへの番だ」と言われた女性も一緒に立って配ってくれたそうです。その若い女性と後で会うチャンスがあって、「どうしてあのときあんなふうになつたの」とお聞きしました。そうしたら、「自分は事件ものが好きで、罪を犯す側の人の気持ちが何となく理解できた。だから、彼（少年）側に寄り添って立てたと思う」と話してくれました。彼側に寄り添って立っているから、あの少年も気持ちを許して、そういうことを聞いてくれたのだと思うのです。横にどう立つかということが問われているなということ、彼女の話聞いて思いました。

広島でやっとバスが止められ、ケガ人だけでも出してくれという要求に対して、少年は「ピストルに弾一発入れて持つ

てこい」と言いました。警察の方は、ピストルは渡せないということを、時間をかけて丁寧に説明され、少年は防弾チョッキに要求を変えたのです。

防弾チョッキはすぐ手渡されたのですが、重装備と軽装備があることを、インターネットか何かで調べていたのかもしれませんが。「これは偽物だから本物を持ってこい」と突っ返しました。警察は本部まで取りに行かれ、そこから待たされた時間がかなり長く、少年もイライラしていたと思います。立ってくれた女性が警察の方に向かって、「中にはケガ人がいるんだから、防弾チョッキを早く持って来て」と叫んでくれました。そのとき少年は、「おい、あんたんごと言う人、すいとー（僕、あなたのように言う人、好きです）」という会話があり、やっと防弾チョッキが手渡されました。

そのとき、私は意識があったので、これで助け出されると思ったのですが、私が自分の力で座り込んでいるのが少年にはしゃくに障ったようで、「こいつしぶといな、殺してやろうか」と最後に言いました。そのときも、立ってくれた方が「もう、よかやんね（もう、いいじゃない）」という一言で少年は気持ちを収めてくれました。

窓から出せという少年の指示で、ほかの乗客に抱えてもらいながら、私は窓から出してもらい、救急隊員の手に渡った瞬間、「助かった」、それだけでした。ほかの乗客は大丈夫だろうかとか、そんなことを考えるゆとりは一切ありません。自分のことだけだったんですね。逃げた乗客に対してひどい誹謗中傷があり、自分の家に住んでいられなくなったり、仕事を辞めざるを得なくなった被害者の方もいらっしやいます。

でも、あの状況にしなければ感じられない恐怖。みんな同じ被害者だと私は思っています。だから、ケガがあったり、亡くなられた方は大変だったんですけど、何もなかった乗客の方も同じ被害者だなと私は思っています。

そうやって私たちは救出されましたが、次のインターチェンジでSATという警察の特殊部隊がバスの中に突入し、全員助かったということを後で知りました。事件当時、少年は不登校から家庭内暴力になっていて、精神科の病院に医療保護入院がなされていました。その担当の精神科医と両親が、説得するために呼ばれたそうです。まずは専門的な知識が必要だろうということで精神科医が説得したけれど、説得できなかったのです。後日、私は少年の両親とお会いしましたが、「あのときに私たちも説得したかったけど、説得させてもらえなかった」とお聞きしています。そこで特殊部隊がバスの中に突入し、この事件は終わりました。

バスを乗っ取った少年の背景 ～中学時代のいじめ、高校入学後の不登校からひきこもりに～

でも、17歳の少年がこんなことを何でしなければいけなかったんだろう。私なりに考えて、新聞報道によるもの、それから両親の手記がその年に出了たのですが、それを读ませてもらい、短くまとめたものをお話します。

小学校高学年で学校があまり面白くなかった。そして中学時代、ひどいいじめに遭っていたそうです。佐賀市の教育委員会は「いじめはなかった」と発表していますが、いじめ

は確かにあったそうです。ある決定的な事件として、少年は音楽室に忘れた筆箱を同級生に取り上げられ、「これが欲しいなら、ここから飛んでみろ」と言われ、ある廊下の踊り場から無理やり飛ばされ、腰を圧迫骨折してしまいました。そこはよく、学校の生徒たちが飛んでいる場所だったという報道がなされています。普通、飛ぶという行為をする子は、よく飛んでいたりと、心も体も「よし飛ぶぞ」と思いながら飛ん

でいると思うのです。でも、少年は無理やり飛ばされ、心も体も準備しないまま飛んで、ケガをしたのは、当然だったのかなと私は考えています。そして入院を余儀なくされ、高校入試も入院先で受けたそうです。

佐賀の学力の高い高校に無事合格したのですが、1週間かそこらで不登校、そこから引きこもりが始まったようです。両親はいじめられていたことはご存じで、この子の心の闇、傷をどうにかしてあげたいという思いで、いろんな方に相談されたそうですが、少年は頑としてそういうところには行かなかったようです。

仕方なく、両親はある有名な精神科医にご相談され、その精神科医の方が警察や病院を動かし、医療保護入院をさせたようです。その病院で両親と別れるときに、少年は両親に対して「覚えていろよ」と言ったそうです。そういう入院だったので、両親が面会に来るたびに非常に暴れていたそうです。

精神科医は、少年が早く退院したいということをご存じで、「君、早く退院したいんだろう。早く退院したいなら、両親が面会に来るたびにその態度だったら退院できないよ」という指導があり、少年はいい子の仮面をかぶったと思いま



す。両親が来るたびに普通に会話する少年。その様子を見て、医師は「ずいぶん落ち着いてきたな」と。家に帰したりしながら、1泊の外泊が許され、そのときに少年は事件を起こしてしまいました。

病院で、彼の中学時代につらかったこと、いろんなことを聞いてくれたら、事件は起きなかったんじゃないかな。入院する前に、友達や学校の先生、様子を見た人たちが「あのとき嫌だったね」と声をかけてくれたら、事件は起きなかったんじゃないかなと、正直、私は思っています。

わが子の不登校と少年の不登校 ～話を聞いてもらうだけでいい、隣にだれかいてくれたら～

それはどうしてかという、実は私の子どもも不登校の経験があるからです。小学校のときは、学校へ行かなくていいよ、どうにかなるだろうと、親の不安はなくて（子どもの不登校を）受け入れていたんですね。家をしっかり居場所として過ごしていました。中学になり、再度不登校になったときに、「中学になってまで甘えるの」「高校受験もあるのに勉強はどうするの」、親の不安・不満で受け入れられない私がいたのです。そのときの子どもの姿と、少年が包丁を振りかざしたときの姿がどこかでオーバーラップしたのかな。これは後付けですが、そんなふうに思いました。

そこで子どもに聞きました。「あなたの不登校のこと話していい？話してほしくないんだったら、お母さんはこの事件について一切話さないから」。子どもを守るのには親しかいない。被害者も話したくないことは話さなくていいんですよね。そういう意味で聞きました。しばらくして子どもが「話していいよ」と言ってくれたから、いろんなところで話せる私がいます。

「あの少年は誰からも話を聞いてもらえず、つらかったと思うよ。だから話していいよ」と言ったんです。うちの子はいろんな人に話を聞いてもらえていたんですね。「話を聞いてもらうだけでいい」と。さらに「答えは自分で出すから」とも言いました。

でも、これが非常に大人にとって難しいんですよね。聞くだけ。やっぱり何かアドバイスしたくなるじゃないですか。こうしたら、ああしたら。私もそういう人間で、子どもがその後もいろいろ話したときに、「あら、こうしたらよかったんじゃない」「これがいいんじゃない」とつい答えを言ってしまう。「お母さん、答えは要らんとやったやろう」、何回も言われながら少しずつ自分の中に落ちていきました。

そうやってわが子の不登校と少年の不登校、どこが違ったのかなと考えると、うちの子は隣に誰かいてくれた。少年はそういう人が誰もいなかった。そこが同じ不登校とか、いろんなことがあっても、道が分かれていくのかなと感じています。

入院先の病院で ～精神科医や看護師との関係の中で癒されて、自分を丸ごと受け入れた経験～

私たちケガ人は病院に運ばれました。救急車の中で「もう1人の人はダメだったみたいだな」と救急隊員の方が話していらっやいました。ああ、塚本さんは亡くなられたんだと分かったんですが、つらいとか悲しいとか、一切感情が動きませんでした。

バスの中の状況を皆さんに話しましたが、感情が動いていないんですね。目と耳からの情報だけでした。病院に運ばれ、見ず知らずの人からたくさんの血をいただきました。指を動かす筋や血管などが切断されていたので長時間にわたる手術だったそうです。

そうやって意識が戻ったときに、あまりのつらさに「あのとき死んでおけばよかった。塚本さん、よかったね」と正直思いました。そして、少しずつ元気になっていくにしたがって、今度は自分が生きているのがつらくなりました。一緒に行った塚本さんは亡くなられ、塚本さんやご遺族に対して申し訳ない、そういう思いが出てきました。

そういう中、精神科医の方が来られて、「山口さん、大変でしたね。おつらかったでしょう」と言ってくださいました。自分で分かっているんですよね。その言葉で、ああ、自分はつらい状況にいたんだ、大変な状況にいたんだということが



自分の体の中に入ってきて、まぶたの裏が血の色だったんですけど、少しずつ薄らいでいきました。そのとき、その人にかける適切な言葉って、こんなに癒やす力があるんだということを体験しました。

我が家へ帰って ～わが子から「お母さんが変わった!」と言われ、気づいた自分の変化～

「1カ月余りの入院でギプスが取れ、リハビリもここでしてくれないか」と執刀した医師からお願いされたのですが、家族のもとに戻りたいという思いで、佐賀に帰ってきてリハビリ入院しました。半月余りの入院で、なんとか自分の洋服の着脱だけはできるかなというところで自宅に戻ってきました。

自宅に戻って、たった1カ月半の入院だったんですけど、家族がいるということがこんなにありがたいんだと感じました。それまで家族とともにいるということは当たり前だったのです。でも、しばらくの間離れていて、ちゃんと家族がいて、戻れる場所があるということをうれしく思いました。

1カ月か2カ月位経ったときに、子どもが以前より明るく元氣になってくれたんです。母親が生死を境にしたことで、子どもたちもいろいろ大変だったろうと思って、そういうふうになんか声をかけたら、子どもが笑いながら「お母さん、違うよ」って。「お母さんが変わったから」だったんですね。

私は病院で、頑張っている自分もいい、頑張らない自分もいいと、自分を丸ごと、無意識に受け入れていました。だから分かっていなかったのです。でも、子どもと接するときに、

術後、執刀した医師の方は、土曜日でも日曜日でも、私服で出てきてくださって、指先を触ってちゃんと感覚があるかなと、私の安心を重ねてくださいました。

看護師の方も、本当に大切にしていっているなということを感じることができたんですね。両手ギプス、首も動かせない状態で、しばらくしてお手洗いは行けたんですが、あと全てを看護師の方に委ねて1カ月余り過ごしました。

大切にさせていただく中で、何もできない私も生きていいと感じることができたんです。それまでの私は、頑張っている自分もいい、頑張らない自分はダメだと思いながら生きてきて、頑張れない人を見たときに、ダメな人だと思う私もいました。そういう私がなんと傲慢だったろうということを病院で感じさせてもらいました。

自分を丸ごと受け入れている私は子どもを丸ごと受け入れていたのです。

事件前だったら、子どもからいろいろ愚痴を聞いたりしたときに、「それぐらいあなたが我慢すればよかったんじゃない」「それぐらい社会に出たら当たり前だよ」と上から言っている親でした。

でも、事件後、自分をどんな私でもいいと丸ごと受け入れている私は、子どもたちに「そんなことがあって嫌だったね、つらかったね」と、子どもの気持ちを気持ちとして無意識に受け入れていました。子どもたちってすごいなと思いました。関係をつくるときに相手がどういう気持ちで自分と向き合っているのか、敏感に感じながら関係をつくってくれていたのです。

子どもだけじゃない、大人だってそうだと思うのです。相手にこう言ったら喜んでくれるとか、こう言ったら嫌がられるとか。そういうことを自分で考えながら、関係をつくっている。そこから子どもたちとの関係がすごくよくなりました。当たり前前に生きていい、頑張らなくていい、親の前でいい子でなくていい。そういう思いを子どもたちが感じてくれました。

「少年」の両親 ～少年の親からの謝罪、「そうだったね」と共感してくれることの大事さを教えてもらう～

家族の空気感がよかったという中、少年の両親から手紙が届きました。「本当に申し訳ありませんでした。できたら直接お会いして謝りたい」。子どもが育つというのは、家族だけ、家庭だけではないですね。私は、子どもを取り巻いている学校、仲間、親戚、近所の人、いろんな人の関係の中でしか子どもは育たないと思っています。

でも、一番小さい単位である家族、両親には謝ってほしいと思っていました。そこである日突然来られたので、驚きとうれしさでお会いしました。小さくなり、ひたすら謝り続けられる両親を私は責めました。「どうしてこういう結果になってしまったんですか。うちの子も不登校でした。子どもを守れるのは親しかいないじゃないですか」。泣きながら責めました。

同じ不登校という経験でつらい思いをしているというのが分



かるからです。両親は「いろいろなところに相談したけど、こんな結果になって申し訳ありません」。

いろいろ話しながら、「よかったらまた少年の様子を聞かせてほしいから、来ていただけませんか」とお願いしました。次に来られたとき、お父さんは、わが子が殺人者になったということで仕事を辞めさせられ、誰からも電話が入らなくなった。孤独、孤立ということを感じて、わが子もそうだったんだと共感されたんですね。面会に行ったときにそんなふうに言ったら、子どもの顔の表情が柔らかくなって。それまでご飯がよく喉を通っていなかったようで、『お父さん、これからご飯食べるから』と言ってくれました」と教えていただきました。

「少年」と出会い直す ～少年との3度の面会、そこで感じたこと～

そこで、私は示談書に「もし少年が会ってくれるなら会いたい」と入れてもらいました。それを知ってか知らずか、少年が入っている京都の医療少年院から打診がありました。「よかったら面会してもらえませんか」と。私は会いたいと思っていたのでそれを承諾しました。ただ、少年院に入っている加害少年と会えるとは思ってなくて、びっくりしたんです。退院した後に会えると思っていたんですね。でも、そこに会いに行きました。

教官と私が待っている部屋に、他の教官に連れられて少年が入ってきて、深々と謝ってくれました。被害者と加害者が謝るという行為は法律で全然規定されていないんです。一番大切なことだと思いますが、悪いことをしたら謝る。しかし、私は謝ってもらおうと思って行ったわけじゃない。でも、謝ってもらってうれしかったです。当たり前のことを当たり前にしてくれたことがうれしかったです。

そして彼の横に座り、背中をさすりながら、「これまで誰からも理解されずつらかったね。でも、あなたの罪を許したわけじゃない、許すのはこれからです。これからの生き方を見ているから」。そう言ったら、これまで生きてきた少年のつらさ、この事件後に生きていくつらさを感じて、涙があふれてきました。

いろいろ話した後、教官の方に少年院の中を案内していただき、帰り際に「少年が戻っていくのは両親のもとだと思います。両親の教育をしてほしい」とお願いしました。

少年と面会を3回したんです。2回目は少年と2人だけにしてもらいました。少年は自分の本音を話してくれました。本音だから皆さんには伝えられませんが、私を信頼してくれたなと感じて、うれしかったです。そして私はどうしてこういう事件を起こしてしまったのか、考えてほしい。考えて、私に話せることがあったら、もう一回会うことが分かっていたので、「話してね」とお願いして別れました。

3回目のとき、佐賀まで連れて来られたのです。塚本さんのお墓参りをした後に会いました。少年はお墓に手を合わせながら、この中に眠っている人を自分ではあやめてしまった、そのときの情景がひょっとして浮かんだと思います。少年院では、これから先どういうふうに生きていくかという教育がなされていると思うのですが、その事件のときに引き戻された

た。よかったなと思いました。

わが家もそうですけれども、共感するということ。親子で共感できたら最高ですけど、なかなかそれはできない。誰でもいい。周りの大人、仲間、そういう人たちが「そうだったね」と共感してくれることが大事だなということをお父さんから教えてもらいました。

しばらくして示談ということになるんですね。両親と少年からの示談書が出されて。私担当の弁護士は、金額だけだったので、あきれました。当時は被害者のことを思って被害者支援をされている弁護士というのは少なかったようです。

のでしょう。私と会ったとき、少年は一言も話すことができませんでした。それは人間として当然の感情かなと思って、何も話せない少年の横で、教官の方と少し話して別れました。

その後、自分でこんなことがあって、こんな事件を起こしてしまったのではないかと。自分なりに精いっぱい考えて返事をくれました。

ごめんなさい。1回目の面会の時のことを言い忘れていました。私が面会をして泣いた後に、少年から手紙が来て、「山口さんが、僕のことを思って泣かれたときに、自分の罪深さと温かい思いが同時に湧き起こりました」と書いてくれました。どんな子どもたちも感情を持った子どもですね。面会をさせていただく中で、そういう交流があって、少しずつ彼は大丈夫だと思えるようになったんですね。

もし面会がなかったら、私は今でも大丈夫だと思いながらも、揺れていると思うんですよ。でも、ちゃんとその人を目の前にして話せたっていうので、大丈夫だっていうふうに確信に近いものを持っています。



仲間と共に不登校の親の会を開き、その後居場所を始める ～きっかけ、親の会・居場所でのこと～

1カ月余りの入院の後、リハビリ入院で佐賀に戻ったときにカウンセリングを受けたんです。被害者支援団体が、佐賀で2000年4月に立ち上がっていて、私が戻ったのが6月の終わりごろでした。そこで、被害者支援団体の代表の精神科医の方がカウンセリングに病院まで来てくださいました。その方は、子どもが不登校のときに知り合っていた精神科医だったんですね。彼も気心が知れている、私も気心が知れている。そういう中、開口一番「あの子にも居場所があればよかったね」と言われました。ああ、居場所か。

今は「居場所、居場所」ってよく言われていますけど、当時、20年以上前なので、「居場所」ということがそこまで流行語じゃなかったんですね。わが子が不登校のとき、適応指導教室、今は教育支援センターって言われていますけども、そこに通っていました。あっ、あそこがうちの子の居場所になっていたんだと感じました。少年には居場所がなかったんだ。元気になったら居場所をつくりたい。その精神科医の言葉がずっと私のおなかに落ちました。

事件から1年後ぐらいに、幼稚園で一緒だった保護者の方から電話をいただきました。「山口さん、大変だったですね。事件に遭って」。お見舞いの言葉とともに、私が報道で「わが子も不登校だった」と言っているのを聞いて、「実はうちの子も不登校でね」と、不登校の相談になっていったんですね。そして、親たちで集まろうよという話になり、自然発生的に親の会が立ち上がっていききました。

私は最初、居場所と思っていたんですけども、居場所より、取りあえず家庭が居場所になればいい。そのためには親が子どもを受け入れていかなければ居場所にならないんですね。そういう意味で親の会が先に立ち上がってよかったなと思っています。

親の会が立ち上がって、親が今は学校に行かなくても、勉強しなくても大丈夫と思えたときに、家庭は居場所になるんですね。だけど、そこにおばあちゃんがいる、「学校に行かんば、どがんすね（どうするの）」と、学校に行かない孫を責めて家庭が居場所にならない。そこで「居場所が欲しい」という声が上がって、使われていない家を無料でお借りして、居場所が始まりました。

まずは親の会のことからお話ししたいと思います。こういう講演会にあるお母さんが来られて、講演が済んだ後に「実はうちの子、不登校でね」という相談がありました。「よかったら親の会に来ませんか」とお誘いをしたら、すぐ来てくださったんですね。

そして、そのお母さん曰く、「うちの子、一日中寝間着を着て過ごすんですよ。情けなくて」。親のしつけとか、そういうものができてない、そういう思いだったと思います。私は、退院した後、着替えるなんてできない、考えられなかったですね。寝ているのがやっとでした。「だからあなたのお子さんもそれぐらいエネルギーがなくなっているんじゃない」って、言いました。ほかのお母さんも「ああ、そうだ。うちの子も着替えない時期があったわ」。そういう会話があって、いろん

な人の会話が続きました。

次の親の会の時、そのお母さんが「親の会からの帰り道、涙があふれて止まらなかった」とおっしゃいました。それまで自分がつらかったんですね。子どものその情けない姿。学校にも行かない子を前にして、いらいらして。それが、子どもがつらかったんだと、思いが真逆になられた。親の会に1回参加されただけです。

そして家に帰り着いて、涙を拭き、心を整えて「ただいま」って入っていったら、それまで一度も出てこなかった、「おかえり」とも言ってくれなかった子どもが出てきて、「おかえりなさい」と言ってくれたそうです。「ただいま」の声だけです。引きこもったり不登校している子は、身体の全てをアンテナにして、相手がどういうふうに入っているかを感じながら暮らしているんですね。お母さんの声が変わったことを敏感に感じました。そこから少しずつ家族関係が変わっていかれ、その子は最終的には仕事まで始められました。

なかなかそういうお母さんはいません。親の会に何回もきて、何回も家族との関係に、揺れながら少しずつ変わっていかれるんですけども、本当にそういう人は珍しいなって。

そこで、「あなたはどのようにしてそういうふう子どもが変わっていったと思う？」と聞いたら、「私は子どもを同居人だと思って暮らしました」と言われました。すごく衝撃的でした。同居人。なかなか思えない親が多いです。しかし、親と子は対等なんですよ。人権のことを考えたら。でも、そこまで親は思い至らないのです。そんな彼女のすごさを親の会で教えてもらいながら、私自身が学ばせてもらっています。

次、居場所でのことです。わが子が不登校になったときに、何もなくていい、子どもに任せればいいと学んだ私だったんですけど、よその子を預かるとなると、そういうわけにはいきませんでした。どうにかしてあげたいと。

それって子どもたちは感じるんですね。そこで、ある元気な不登校の子から、「僕たち何もしてもらわんでよか（してもらわなくていい）」ということ強く言われました。そのときは、ムツとしましたよ、せっかくなやうやって居場所をつくってあげているのにと思って。でも、そうじゃないんですね。ここは私たちの居場所でもあるんですよ。だから対等なんですよ。その子の「何もしてもらわんで」という言葉で、また、そうか、



ここは私も居場所にしていいた。そういうふうに感じる事ができました。

これは事件後、主任児童委員を委嘱されているときのことです。ネグレクトされた子を預かりました。その子を居場所まで連れていったんですね。17歳でしたが、タバコを吸うんですよ。それであるスタッフが「未成年だし、体に悪いからタバコをやめさせようよ」と言いました。私は「ちょっと待って。あの子にとってタバコがどういうものなのか聞いてみるから」と言って、聞きました。その子は胸を張って、「タバコは、俺は飯より大事だ」と言ったんですね。ああ、そう、あなたにとってタバコは飯より大事なんだねって返して、それであとは何も私は言えませんでした。

その日も、「お昼ご飯何が食べたい？今日は何を食べようか？」と言って、子どもたちから要求を聞いて、そして、「買い物に行きたいもの」と声をかけ、一緒に行って、作るんですね。（食費200円集める）その日はチャーハンをつくりました。彼は山盛り2杯食べたんですね。だけど、ご飯代は払えません、お金はないから。そこで元気な不登校の子が、「金払わんくせに腹いっぱい食べて、タバコは買うくせに」と言うんですよ。でも、私はそれはそれでいいと思って放置しているんですね。

気まずそうな顔で、やっぱりタバコを吸うのですよ。そうしたら横にいた子が、「僕、タバコ嫌いだから、よそで吸ってくれない？」と頼みました。その子は「山口さん、どこで吸えばいい」って聞きましたけど、「それぐらい自分で考えなさいよ」と突き放したら、その子は玄関付近で吸っていました。古い家なので、隙間風で煙が入ってくるんですね、部屋に。そこで「煙が目目に染みる」って誰か叫んで、その子は仕方なく玄関から出て、外でタバコを吸っていました。

主任児童委員として預かっていて、冬だったので、寒いから途中で帰るんじゃないかってちょっと心配したんですけど、しばらくして「おお、寒かった」と言って、入ってきました。よかったと思いながら、でも、タバコどうしようと悩んでいたんですけど、次からタバコを吸いませんでした。仲間から「嫌だ」って言われたものは、この居場所に来るためには吸えないと、彼は判断したんでしょうね。アイメッセージで言われたということは、本当によかったな。そんなふうに思っ



ています。

その子があるとき、「俺、ヤクザから誘われているけど、ヤクザのところ行こうかな」って言いました。「へえ、ヤクザから誘われている。ふうん」って聞いて、内心はビクビクして、なんて返していいかわからない。主任児童委員は検討会議があります。そのときに話題に出したら、私をカウンセリングしてくれた精神科医もそこに参加されていて、「山口さんのところの居場所と、ヤクザのところと、どっちが居心地いいんだろうね」と言われました。

「居心地かー」と納得しました。その後居心地をよくしたわけじゃないんだけど、嫌は嫌、そして否定はしない、ちゃんと受け入れているということを感じてくれたと思います。ヤクザのところには行かないで、ずっと来続けてくれました。

主任児童委員で近所に住んでいる子だったので、あるときスーパーで偶然会って、向こうから「おお、山口さん」って声をかけてくれました。「あら、今どうしてるの」って聞いたら、「あるスーパーで働いている」という返事。よかったなと思いました。どこかに自分が居場所とできる場所があったということで、その子とその子らしく生きていけているなと思って思えました。あの居場所は、私がどうにかできるわけじゃない。みんなでつくり上げている居場所。そのありがたみをさらに感じる事ができました。そうやって、居場所も、まだ今もずっとやり続けています。いろんな子が来ます。それを受け入れながら、楽しくやりとりをやっているんですね。

佐賀少年刑務所での講話 ～一番伝えたいこと、望むことは～

実は、私は2006年から今も佐賀少年刑務所へ“被収容者に対する刑執行時指導”で、月1回講話を続けています。その中で、本日、お配りしたレジュメの裏に、私が書いた「西鉄高速バスジャック事件の被害者になって」というコラムを載せています。よかったら後で読んで下さい。少年刑務所に行ったら被害者が来るというので、非常に緊張した面持ちで迎えてくれるんですけど、私が今のようなお話をしたら、涙する人、顔の緊張がほぐれていく人、いろんな方がいます。

彼らに一番伝えたいことは、やっぱり再犯してほしくないんですね。二度と被害者をつくってほしくない。そして自分も加害者になってほしくない。それが一番の願いで、そういう

気持ちで伝えています。

また、最後に言う言葉は、二度と繰り返さないために、教官の方や自分自身と向き合いながら考えてほしい。やっぱり考える。考えなしでやってしまうんですね。でも、考えるっていうのは、誰かと向き合ってもらって考えることができるのかなと思うんです。だからアドバイスは要らない。ただ聞いて、その人の中で答えは出していける、それを信じるということが大事なかなと思うんですね。

起こったことは変えられません。バスジャック事件も変えられません。でも、それをどう受け取っていくか、受け入れていくかということはいくらでも変えられるんですね。だから加害者の人

も、それがあったから今の自分がある。そういうふう生き
ていっちゃう方もきつといっちゃうと思います。そういうふ

うになっていかれることを非常に望んでいます。

失敗しても終わりじゃない社会にしていけるために ～自分の本当の姿をありのままに受け入れてくれる人との出会いが大切～

失敗は誰でもあるんですね。失敗をもっと許していける
おらかな社会になっていかなければいけないと思うんです
けど、ますます今は生きづらくなっているなと思います。

不登校もそうです。文部科学省も新しい法律（教育機会
確保法）を作っていますが、学校に戻したいという、学校の
先生たちの思いで、生きづらさを抱えている。もちろん、法
律などができて、ちゃんと学んでいる先生方は変わってい
ているんでしょうけど、そうじゃない方にとっては変わってい
かないんですね。親が悪い、不登校している子が悪い、学
校に来るのが当たり前、そういうふうな思いもあって、犯罪
者の方もきつとそういう社会の中で、より生きづらさを感じ
ていっちゃうと思います。

先日私はテレビで協力雇用主の建設会社の女性社長のド
キュメント番組を見たんですね。社長自身も刑務所に入った

経験があり、社会での生きづらさを感じていっちゃうり、自分
で事業を立ち上げた方でした。その中で印象的だったのが、や
っぱり孤立させない。孤立したら再犯につながるんだってこと
を言われてて、その社長の生きざまを見てすごいと思いました。

人生に失敗している人たちを、徹底的に信じていっちゃう
んですね。自分の会社を足蹴りして出ていったような人も
探し出して、その人を迎えにいかれていたんですよ。すごい
なと思って、そういう方もいっちゃうなと思いました。

その中で彼女が言われていたことは、「自分の本当の姿を
ありのまま受け入れてくれる人との出会いだ。それが彼らを
再犯に走らせない力になる」と締めくくられていたので、本
当にこれは不登校だろうが犯罪者だろうが同じだなと思いな
がら観ていました。

被害者も加害者もこれ以上生まないために ～お互いに再生していけると信じる～

再犯してほしくないという思いで、いろんな人にお話しして
いるんですけれども、被害者も加害者もこれ以上生まないた
めにどうしたらいいのかな。お互いに再生していけると信
じる。この演題を「再生」とさせてもらっていますけども、再
生するためにはもう一度、自分を編み直す必要があるんです
ね。そして編み直すには、もつれたところをいったんほどい
てから編み直さなければいけません。ほどこには、誰かに話
を聞いてもらい、安心を手に入れることが大事だなと思いま
す。その安心・安全を手に入れることで、自分をほどこる、
開いていけるというふうには私は思っています。

ほどこいたら、また気を取り直して自分で編み直せばいい。
安心・安全を手に入れた人は、何度でも編み直せると思い
ます。私もたくさんの人との出会いの中で、いろんな編み直
しが出来ていると思います。こうやって話をするのも、私は
疲れたから、被害者としていつまでも話しをする必要はない
じゃないか。もうずいぶん前の事件だから話さなくていいん
じゃないかと、何度も思いました。でも、それを後押しして
くれる人がいっちゃうんですね。

浜井センター長のご挨拶の中にも出てきました京都医療
少年院の当時の院長先生と、年賀状のやりとりをさせていた
だいていたんです。私が事件から10年ぐら経ったところだっ
たかな。そろそろ（被害者としての話を）やめようと思うと
年賀状に書いたら、「自分たち官民には、言えないことがあ
る。民間人である、一庶民であるあなただから言えることが
ある。だから疲れたならばしばらく休憩をして、また始めてく
ださい」と励ましをいただいて、ああ、そういうこともある
んだと、気づきをいただきました。

そこでもう一回気を取り直して、こうやっていつまでも続
けているんです。けれども、わが子に対しては、不登校のこ

とをいつまでも言って、嫌だろうなって思ったり、少年に対
しても、私は面会以降会っていないから知らないんですけれ
ども、普通に生きているのに、いつまでも事件のことを話し
て嫌だろうなって、そんなことも思っています。でも、一般
の人たちが、「犯罪者は最悪だ」「ずっと刑務所に入れとけ」
とか、そんなふうにする気持ちじゃなくて、加害者になる人
も以前は被害者だったんですね。そういうところもお互いに
理解していけたらいいなと思いながら続けています。

あのバスジャックの少年もひどいじめに遭っていました。
でも、いじめている子も傷ついているんですよ。そういう中、
いじめていた子が通っている高校の先生に、「僕はあのと、
彼をいじめました」と吐露したそうです。吐露できる先生が
いっちゃうってよかったなと思いました。きつとこの先生は信
頼できると思って、吐露したんじゃないかなと思います。

だから、そういう大人に一人一人がなっていくということが
大切なんですね。私自身も、そういうふういろんな人を責
めないで受け入れながら、これからも生きていきたいと思
います。再犯をさせないということは、日本の未来なんです
ね。大きく言えば。

再犯があると本当につらいです。もしあのバスジャックの
少年が事件を起こしてしまったら、私たちの傷や塚本さんの
死が無駄になるんですね。これは少年刑務所でも伝えていま
す。「自分の起こした事件を無駄にしないで生かせるために、
どう生きていったらいいかを考えて」とお願いをします。そ
ういうサポートができる大人がいっぱい増えていけばいいかな
と思っていて、私たちは、これからもあんまり頑張らなくて
いいと思うんですけど、精進して生きていこうと思っています。
どうぞ皆さんよろしく願いいたします。今日はありがとうご
ざいました。（会場拍手）

○司会者 山口さん、本当に素晴らしいお話をありがとうございました。ここから質疑応答の時間とさせていただきます。質問のある方は、挙手してください。私の方で指名をさせていただきます、質問される方のお手元にマイクをお届けします。どうぞ。

○質問者A 今日の話で私が感じるのは、山口さんは強さということを感じているんじゃないかと。

例えば不登校の話がされましたが、そのときに、学校に行かなくてもいいよと言われました。たぶん、親も、それから相談する人も思い切って、その当事者を受け入れているんだと思うんですけども、当事者は学校に行かないという強さ、そういう強さで社会と対抗しているのではないかと。

また、再犯のお話もされました。何回も同じ事件を起こす、前の事件が無駄になっているのではないかと。それもある意味、その当事者にとっては、強さがあるが故に、そういうことで社会にあらがっているのではないかと。

学校に行かないのは、その子なりの理由・背景があるからだと思っています。そうした子どもの強さをやっぱり理解してあげるんですか。そこが聞きたいです。

○山口氏 私、自分自身も強いとは全然思っていない。だから子どもの強さじゃないんですよ。ただそのありようをそのまま受け入れるというかな、認めるというかな。だから学校に行かなくていいというのは、最終段階で行かないあなたをそのまま受け入れる。でも、学校に行きたいんだねっていうのは分かってあげる。

だから強さじゃなくて、その曖昧さじゃないかなと思うんです。私自身も非常に曖昧に生きていて、揺れる。柳に風じゃないけど、しなやかという言い方もあるけれど、強さって言われたら、何かこう、バンって強いという感じがするじゃないですか。私は全然強くないです。打たれ弱いです。

○質問者A 私が伝えたいのは、相談者だけでなく、その相談する人も、やっぱり相談に行くまでに強い意志がないとできないと思います。

○山口氏 そう、それは絶対だと思います。

○司会者 ありがとうございます。他にご質問のある方、挙



手をお願いします。どうぞ。

○質問者B とても興味深いお話でした。ありがとうございます。まず質問の前に前提として知りたいんですけど、今もお居場所をつくることに関わっておられているということで、その居場所はだいたい何年ぐらいからですか。

○山口氏 事件後の2001年に親の会は始めたので、居場所をつくる活動は2002年からですね。

○質問者B 2002年からということなので、もう20年以上になるんですね。

○山口氏 そうですね。もう22、23年ぐらいになりますね。

○質問者B そこには、だいたい、今までつながりを持つ機会に恵まれなかった、10代後半の子どもたちが多いということで合っていますかね。10代、高校生あたりの年齢ぐらいですかね。

○山口氏 いやいや、幼稚園生や小学生から来ていました。それから、もう30歳、40歳過ぎの大人も来ていました。

○質問者B なるほど。結構、年齢に幅が広いんですね。

○山口氏 そうなんです。年齢に幅が広いんですよ。

○質問者B なるほど。それでは、そのことを前提とした質問なんですけれど、この20年で、それぞれ人の生き方が多様になっていたり、僕自身、前は仲が良かったのに、今はSNSだけの関係性にとどまっていたりと、つながり方にすごい幅が出てきた20年だったと思うんですけど。

これまでつながりになかなか恵まれなかった人たちが、新しくその居場所ですぐつながりをつくっていく中で、この20年、そのつながりのつくり方に何か変化があったりとか、逆に時代はそう変わっていても、コミュニケーションでここだけは変わらない、その新しい関係性をつくることに関して重要なポイントだと思ったことがあれば教えていただきたいです。

○山口氏 ありがとうございます。私たち以外の新しい親の会の、若い親の会の方たちは、そうやってインターネットを使った親の会やSNSとかでつながっているんですけども、私は基本、Face to Faceが基本なんです。私はね。まあ、昔の人間ですので。だからそういう、文字面だけでは分からないと思っています。やっぱり表情を見ながらと





か、その声のトーンとかで、人って何となく伝わってくるじゃないですか。言葉の裏にある感情とかが。だから私はそれを基本にしています。

○**質問者B** 山口さん自身が、そういうことを大事にしていらっしゃるって、山口さんではなくて、そこにいるAさん、Bさんだったりとかのコミュニケーションを見て、何か思うこととかはありますか。

○**山口氏** 子どもたちの様子とかを見ながら？

○**質問者B** そうです。

○**山口氏** ううん、やっぱり前は、学校に行かないということが非常に問題だったわけなんですね。20年以上前。でも、今は学校だけじゃないというふうな法律もできていて、支援もたくさんできているんですよ。スクールソーシャルワーカーも配備されているし。私たちのころはスクールカウンセラーだけだったんですけど、今はソーシャルワーカーの制度ができて、どう子どもと家庭を支援するか。その人たちの動き方で、すごく元気になっていく子もいるので、そういうところではずいぶん生きやすくなれたのかなとは思っています。

でも、やっぱり学校で受け入れてもらえなかったり、ソーシャルワーカーによって、そこまで動いてくれない方もいらっしゃるんで、私たちと同じようなつらさを抱えている保護者もいらっしゃいます。だから様々な人たちが増えたんじゃないかなと思っています。

○**質問者B** なるほど、ありがとうございます。

○**山口氏** ありがとうございます。

○**司会者** 他に質問のある方、どうぞ。

○**質問者C** 現在、刑務所で勤務しております。山口先生におかれましては、2006年から佐賀少年刑務所で「被害者の視点を取り入れた教育」として、月1回、受刑者を相手に講話をされているということですが、差し当たっ

て、来年の6月から懲役刑が廃止されて、拘禁刑というものに変わります。それまで刑務作業が中心であった刑罰が、今度は矯正教育、いわゆる特別改善指導など、各受刑者の、いわゆる犯罪内容やその特性に応じて、さまざまな処遇が行われることになります。

現に山口先生が佐賀少年刑務所で「被害者の視点を取り入れた教育」を行うにあたって、例えば現場の職員、特に受刑者の処遇を受け持つ現場の刑務官ですね。そういった人たちに対して、何か要望とか、例えば教育の担当者に対して、こういったことをもっとやってほしいみたいな、そういったご希望というのはございますか。

○**山口氏** そうですね。そういう刑務所とか入っている収監者の人たちを、人として向き合ってほしいと思うんですが、昔ながらのところがあるじゃないですか。「はい、きをつけ！」みたいな、そうやって動かされているんですよ。

何かね、もうちょっとその辺を緩めてもらえないのかなと思うけど、でも、官民一体の刑務所でもそういうことが行われているので、なかなか日本の刑務所を変えるのは難しいんだなと思っています。希望としては、やっぱり人として、対等にはいかないまでも、向き合ってもらったらいいいのかなという希望はありますけど、あまりにも規律などがいっぱいありすぎて大変だなと思います。お答えになっていないかもしれませんが。

○**質問者C** ありがとうございます。軍隊的なことをやっている、どうしても、かえって逆に受刑者に対しては、教育がうまく行き渡らないというか、ちょっと現場の職員からも、この拘禁刑にあたっては、まだしっかりと意識変革ができていないかなと、私も現場にいてよく感じますので、先生のお話をしっかり参考にさせていただいて、現場の職員に伝えていきたいと思います。ありがとうございます。

○**山口氏** ありがとうございます。

○**司会者** それでは先ほど、挙手されたそちらの方、お願いいたします。

○**質問者D** 今日は講演ありがとうございました。私は京都市で保育士をしています。自分の家庭では未就学児の子が1人いて、仕事と家庭と両方持っています。

私の子どもも少し精神的に不安定なところがありまして、児童相談所の方で児童精神科の診察の順番を待っていたりとか、発達外来に行ったりとか、少し親としては不安



な部分がありつつも、受け入れながら子育てを、やっぱり子どもの味方でありたいという思いを大切に夫婦で子育てをしたく、こういった講演会にも足を運ばせてもらいました。

先生のお話は全て心に染みるし、やっぱり親が子どもを受け入れられるということは、すごい理想なんですけど、やっぱり仕事を持ちながらハードに生活する中で、いろいろなストレスもあって、子どももやっぱりうまくいかない。受け入れるし、ぐっと我慢して、「そうだよね。つらかったね」って私も声をかけていることが日常なんですけど。

でも、やっぱりこういう社会の中で、いろんな方がいますけど、まず一番に親が子どもを受け入れることができる状態を、自分自身でどう保っていいかというところがすごく課題で、いろんな勉強や先生の本も読んで分かっているんですけど、自分のまず親の精神とか親の気持ちというものが、すごく子どもに伝わるからこそ、先ほどのお話でも「ただいま」という言葉がもらえたり、子どもってすごく感じる事が分かっているので、私の状態が悪くなったりすると、もうすごく分かりやすく子どもの状態にも、チェックが始まったりとか、吃音が始まったりとか、すごくそういうのがあって。保育現場でも、やっぱり私の保育にゆとりがなくなると、子どもに落ち着きがなくなったりとかします。

そういうのを日々、家庭でも仕事場でも感じる中で、自分のまず状態が受け入れられるための方法であるとか、心の持ち方というのがあれば知りたいです。

○**山口氏** ありがとうございます。本当にそうですよね。よく分かります。うちの親の会に来ている方も発達障がいと言われている子どもさんを抱えている方が多いです。私の場合も、わが子が発達障がいって言われてたら薬を飲ませていたかもしれないと思います。

何が、いいのか悪いのか。昔は「あの子は、ああいいう子だね」という感じで受け入れていたのが、現在は、社会が、周りが受け入れてくれないんですね。「あの子、あんなふうで乱暴だね」や「病院で診断してきてください」とか言われて、だから親が大変なんです。

そうですね。親が自分のストレス解消法を何か持ってもらった方がいいかなと思うんですよね。楽しくなるような。それと子どもの気になるところじゃなくて、いいところを探したらどうですか。いいところはいっぱい持っているじゃないですか。時々駄々をこねたりとかはあるかもしれませんが



が、こういうときもあるよなとかね。ただ、私も怒って育ててきたので、あんまりちゃんとは言えないんですけどね。今のお母さんたちって、みんなよく勉強していってしやるなと感じるんですね。

しかし勉強したから、それが実行できるかと言ったら、またそうでもない部分もありますよね。感じていても頭で分かっていなかったり、心や体に落ちてこない場合もあります。究極のところ、この子はこの子で大丈夫っていうことを親が手に入れられたらいいですね。

今、大人の人で発達障がいと思われる方もいらっしゃるじゃないですか。でも、それぞれすてきな大人になっている方も多くいらっしゃるんですよ。私は、その子の持っている特性を大事に周りと共有しながら暮らしていくことがいいと思います。今はこうだけれども、この子はきっと大丈夫って親が思っている、やっぱりその根っここのところを大事に関係を創って行って欲しいですね。

私と連れ合いの大切な子どもなんだという。そこからしか出発できないから、そして、何か嫌なことがあったら、「嫌だ」と言ってもいいと思うんですよ。我慢しないで「お母さんはそれ嫌いだよ」とかね。そして何か間違ったことを言ったら「ごめんね」って親も謝る、その普通の関係をつくっていったらいいのかなと思います。この程度しか、私も専門職じゃないので分かりませんが、いいですか。

○**質問者D** ありがとうございます。

○**山口氏** こちらこそありがとうございます。これからもどこかでお母さん自身も楽しみを見つけながら。同じ悩みをもつお母さんとなつなげることも大事ですよ。そういうことでご理解いただければと思います。いい子に育ててください。

○**司会者** ありがとうございました。まだまだ質問は尽きないと思いますが、残念ながら予定していたお時間となつてしまいました。山口様、今日は貴重なお話をいただき、本当にありがとうございました。会場の皆さま、今一度大きな拍手をお送りください。

○**山口** ありがとうございました。(会場拍手)



第15回 矯正・保護ネットワーク講演会開催案内

主催：龍谷大学矯正・保護総合センター

参加費無料

要事前申込

先着300名様

テーマ

過去と他人は変えられない
けど 未来と自分は変えられる

2025年12月13日(土)

13:30～15:00(開場 12:30～)

龍谷大学 深草学舎 和顔館 B201教室

(京都市伏見区深草塚本町67)

JR奈良線「稲荷」駅下車徒歩約8分

京阪本線「龍谷大前深草」駅下車徒歩約3分

京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋」駅下車徒歩約7分

構内に駐車場はございません。

公共交通機関をご利用ください。

昨年度から会場が変わりましたので
ご注意ください



講演者



ひろせ のぶえ
廣瀬 伸恵 氏

(株式会社大伸ワークサポート 代表取締役)

>プロフィール

昭和53年栃木県生まれ。平成8年18歳の時にレディース暴走族『魔羅啞(マリア)』を結成、初代総長になる。覚醒剤の売人として2度服役。29歳での獄中出産を機に更生し、平成22年大伸興業設立、平成24年大伸ワークサポート創業。平成30年刑務所の出所者を雇い入れる協力雇用主に登録。これまでに200人以上の出所者を雇用している。

【広報活動】

2019年 公益財団法人 清心内海塾 シンポジウム講演

日本テレビ news every 出演

2020年 テレメンタリー2020「もう帰には戻さない～受刑者のための求人誌～」出演

逆転人生「少年院・刑務所から再出発 “一発アウト”の社会に挑む」出演

2021年 NHK ねほりんぱほりん女子刑務所に入っていた人 出演

週刊女性 掲載

2022年 集英社 「人生上等!未来なら変えられる」 刊行

ゼニイタチ 出演

2023年 NHK 宇都宮おはよう日本 出演

2024年 NHK とちすべ 出演

罪と赦し～出所者たちの記録～ 出演

<<その他多数に掲載、出演>>

参加お申込み

参加をご希望される方は、事前にお申込みが必要です。

インターネットから

①矯正・保護総合センターホームページ(<https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>)

の「講演会等のお申込み・資料請求」ボタンをクリックしてください。

②「お申し込みフォーム」の必要事項(名前・住所・メールアドレスなど)を入力し、内容確認後、送信ボタンをクリックしてください。

登録されたメールアドレスに受付完了メールを返信いたします。

FAXから

以下の参加申込書に必要事項をご記入の上、送信してください。

お問い合わせ

龍谷大学 矯正・保護総合センター

TEL:075-645-2040 FAX:075-645-2632

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

<https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>

E-mail: kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp

2025年12月13日 第15回矯正・保護ネットワーク講演会参加申込書

フリガナ	当てはまるものに○をしてください。						
お名前	年齢	10代	20代	30代	40代	50代	60代
		70代以上					
ご住所	〒						
電話番号	FAX番号						
メールアドレス	ご所属・ご職業 (差し支えなければ)						



075-645-2632

研究活動紹介

刑事立法プロジェクトの研究活動について

日本の自由刑は新しい時代を迎えました。2025年6月1日から懲役刑と禁錮刑は一本化され、「拘禁刑」とされました。1907年に現在の刑法が制定されて以来、刑罰の種類が変更されたのは初めてであり、大きな変革といえます。

「懲役刑」は、まさに「懲らしめ」のための刑罰として刑務所内での作業を義務づけるものでした。しかし、「作業だけ」を義務づけることは高齢化社会に合わない部分があります。それ以上に、「刑罰、そして義務だから働け!」と作業を強制することは、社会復帰に向けた受刑者の意欲をそぐこともあるでしょう。さらに、作業の刑罰の内容と考えることは、作業を「労働」としないことに繋がり、その結果、「賃金」ではなく、「作業報奨金」（1人1か月約4,500円）とされていることなどに現れています。釈放後の生活に十分なお金がないことは、円滑な社会復帰にも支障を生むことになります。

このような制度は、受刑者を「社会復帰させる対象」ととらえるものであるという問題意識のもと、私たち「刑事立法プロジェクト」は、受刑者を「社会復帰の主体」と位置づけ、その援助を行う義務が国家にあると考え、刑務作業の義務づけを廃止し、刑務作業には賃金を支払うべきといった改革案を示してきました。

拘禁刑の創設により、刑務作業の義務づけはなくなり、受刑者の社会復帰を意識して、それぞれの特性に合わせて「作業」と「指導」を組み合わせることが可能となりました。もっとも、私たちは、まだまだ検討・解決すべき問題は残っていると考えています。

なぜなら、拘禁刑の内容だけでなく、これを支える「刑罰観」に大きな変化がないからです。例えば、拘禁刑においても、受刑者の改善更生と再犯防止を積極的に図るために、作業と

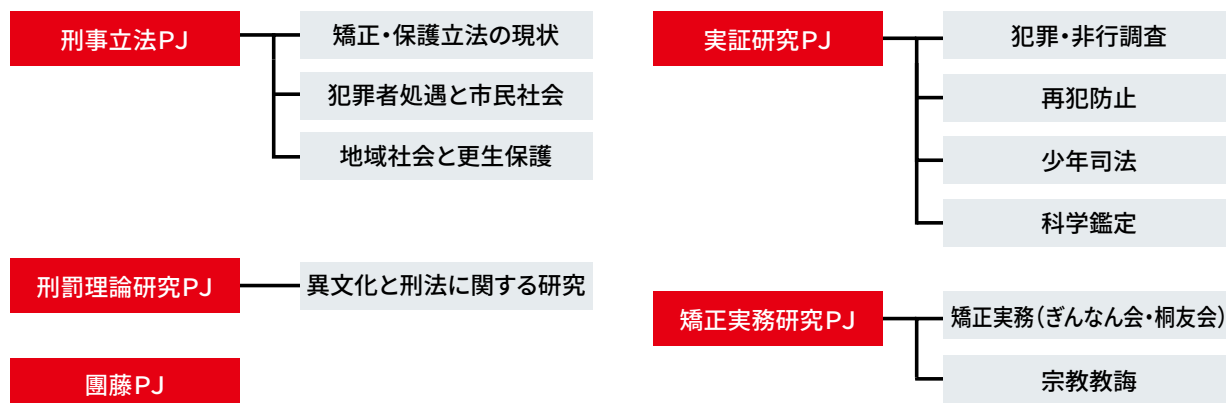
指導を義務づけることが望ましいとの見解は有力に主張されています。現に、賃金制は採用されていません。そうすると、結局、義務づけ可能な選択肢が増えたにすぎません。もちろん、拘禁刑については、ただ作業を義務づけるのではなく、「作業を行うことの必要性を自覚させ、自主的に作業に取り組む意欲を育み、作業を通して、社会生活に適應する能力を育成する必要がある」とされます。しかし、以前と変わらず、受刑者を「社会復帰させる対象」としてとらえる考え方が維持される可能性があります。

近年、犯罪に至るまでの原因や背景がさらに多様化するだけでなく、薬物依存症、クレプトマニア、知的障がいや精神障害による犯罪など、刑罰のみでは「社会復帰」の実現が困難な事例の存在が認識されています。このような状況の下では、犯罪に至る原因や背景、「回復」に至るまでのプロセス、そして、個々人の抱える「社会復帰」に必要なニーズも非常に多様化します。国家が受刑者を社会復帰させることはますます難しい時代になっています。

「刑事立法プロジェクト」は、矯正・保護や未決拘禁を対象として、罪を犯した人自身の人間の尊厳、そしてその主体性保障を前提とした対応のあり方を理論的かつ実証的に研究しています。上述のように新時代を迎えた自由刑を中心として、本研究プロジェクトは、上述の問題意識を持ちながら、罪を犯した人自身の視点や権利を出発点とする「社会復帰」や刑事司法制度の構築を目指して研究と具体的な立法提案を行っています。

刑事立法プロジェクト代表
斎藤 司（龍谷大学法学部教授）

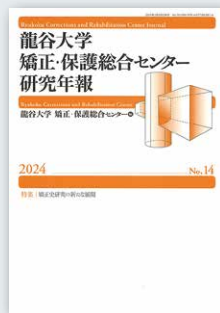
2025年度 矯正・保護総合センター研究プロジェクト



新刊情報

『龍谷大学 矯正・保護 総合センター研究年報 第14号 2024年』

[編集発行者]
龍谷大学矯正・保護総合センター
[発行所]
株式会社現代人文社
[発行日]
2025年2月28日発行



ISBN978-4-87798-881-4

『矯正講座 第44号 (2024年)』

[発行者]
龍谷大学矯正・保護課程委員会
[編集者]
『矯正講座』編集委員会
[発売所]
株式会社成文堂
[発行日]
2025年3月11日発行



ISBN978-4-7923-3454-3

『團藤重光日記 1978-1981』

[編著者]
畠山亮・福島至
[発行所]
株式会社日本評論社
[発行日]
2025年2月28日発行



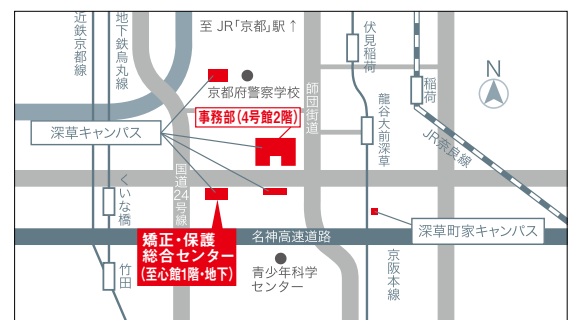
ISBN978-4-535-52835-2

『幸徳秋水 大逆事件の研究 「再審請求」を追及して』

[編著者]
金子武嗣・石塚伸一
[発行所]
株式会社日本評論社
[発行日]
2024年12月30日発行



ISBN978-4-535-52830-7



龍谷大学 矯正・保護総合センター

- 京阪本線「龍谷大前深草駅」下車徒歩約8分
- JR奈良線「稲荷駅」下車徒歩約13分
- 京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋駅」下車徒歩約5分

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
Tel.075-645-2040 Fax.075-645-2632
URL <https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>
E-mail kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp